
血濡れの猫ーブラッディ・キャットー

神崎ボン太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血濡れの猫―ブラッディ・キャット―

【Nコード】

N1522S

【作者名】

神崎ボン太

【あらすじ】

機械の兵士『機界兵』を用いる機界帝国に侵略されている、トレンディア大陸。帝国によって大陸中の国が蹂躪され、滅びていく中――大陸の辺境で暮らしていた少年が、血に濡れたかのように赤い少女と出会ったことによって……反抗への、小さな火種が生まれた。理不尽に立ち向かう、小さな火種が。「私と、【血濡れの猫】と――一緒に戦ってくれない?」

ブログ（前書き）

作者の初オリジナル作品です。不定期更新にならないように頑張ります……頑張りますよ？

プロローグ

「どう、して……？」

——世界の崩壊。

その言葉が、今の状況を表すのに最も適しているだろう。
人々を潤すためのエネルギーを精製するための、天高く聳え立つ
塔は既にかつての面影はなく。人々を潤すどころか、地上に過ごし
ていた人々を自身の巨体で押し潰す。

「何故……なんだ！」

空を夢見る者の夢を叶えた機械の鳥が、その腹から一発で人を少
なくとも百人は殺せる爆弾を何発も地上へ向けて投下しながら、狂
ったかのように飛び回る。

遠くへ行きたいと願った者の願いを叶えた機械の獣が、恐るべき
速度で走りまわり、進路上にいる人々を轢き殺し、撥ね殺す。

強くなりたいと願い、強靱な身体と力を手に入れた者たちが、逃
げ惑う人々を何の見境もなく、一切の容赦もなく——撃ち殺し、切
り殺す。

人々の願いの全てが込められた巨人が、人々を救うための足で人
々を潰し、人々を護るための腕で——人々を殺す。

「どうして、どうしてなんだッ！」

そんな地獄と表現するのすら生易しい光景を見て、青年が叫ぶ。
その叫びには青年の夢、未来——青年の全てが込められていて。

「どうしてっ、なんだあああああ！」

……彼は、自身の全てが壊されていく光景に悲鳴を上げ、手に何も持たずに人々を殺す者たちへと突っ込んでいく。

「うわ、うわあああああああ！」

青年が拳を振るう。それだけで、人々を殺す者たちが吹っ飛ぶ。
青年が叫ぶ。それだけで、人々を殺す者たちは世界から抹消される。

青年が猛る。それだけで、青年の周りにいた人々を殺す者たちは全て消える。

……しかし、青年が倒した者たちは氷山の一角。滅びつつある世界には、人々を殺すモノが青年の力ではどうしようも出来ないほど、蔓延っている。

どうしようもない現実には、青年はその場に崩れ落ちる。何故こうなった、こんなはずじゃなかった——そんなことを考えても、意味はないというのに……考え続けた。

「……エド！ 無事だったか！ ウェン、エドがいたぞ！」

「本当！？」

穏やかそうな雰囲気を持つ青年が、崩れ落ちている青年を見て誰か別の人物の名を叫ぶ。その叫びに応じて現れたのは、銀髪のロングヘアの女性。

女性は青年を視認した瞬間、感極まったかのように口に両手を当てて。

「ッ……エド！ 良かった、無事で良かった……！」

女性は青年——エドに駆け寄って、エドを力強く抱き締めながら涙声ながらも喉から声を絞り出す。

しかしエドは、女性の呼び掛けに応じることは無く。

「……」

「きゃっ……え、エド？」

「ど、どうした、エド？」

エドは女性を自身から引き離し、立ち上がる。エドの突然の行動

に、女性はおろか青年も呆然としながらエドの名を呼ぶ。

が、エドの意識には二人はおらず、彼の意識……視界に映るのは滅びつつある、彼が愛した世界。

「ああ、そうか……簡単じゃないか」

エドはその光景に何かを悟ったかのような声を漏らした後、虚空に向けて人々を殺すモノたちの体液がついた両手を伸ばして。

「壊れたモノは……作り直せばいいんじゃないか」

狂気に染まった瞳で——そう、呟いた。

第一話

——世界は理不尽だ。

「ターゲットNo. 01、確保しました」

「よし、お前はNo. 01を連れて行け……No. 02はこのガキか？」

「ああ、間違いない。確かにこいつだ。情報通りだな」

全身が機械で出来ているような……いや、実際に機械で出来ている『機界兵』と呼ばれる三体の兵士の内の一体が床に倒れていた何かを担ぎながら発した、スピーカーから発せられたようなくぐもった声。その声に反応した一体の兵士がコクリと頷いた後確認するように呟いた言葉に、もう一体の兵士が左腕が展開して現れたモニターを見て肯定の返事を返し、自身の前を見る。

三体の前にいるのは少年だった。歳は十五、六歳だろうか、それでいて幼さが残る顔立ちをしていて、少女に見えないこともない。逆に首まである銀髪がもう少し長ければ、少女にしか見えなかっただろう。

そんな少女のような少年が、腰を抜かして床に尻餅をついていた。少年の顔は困惑に染まっている。原因は言うまでもない。目の前

の機界兵と、その機界兵が自身に向けている機関銃。そして――一体の機界兵に担がれて連れ去られていく、大量の血を流しながらぐったりとして動かない母。

どうしてこうなったのかを考えて、現実から目を背けることも出来ない。何故ならば少年は、一部始終を自分自身の目で見てしまったからだ。

母より先にベッドに入り、眠りにつこうと部屋に行こうとした瞬間に、家の玄関を蹴破って現れた三体の機界兵を。

その機界兵が携帯していた機関銃から放たれた何発もの銃弾に、身を貫かれていく母を。

痛みに顔を苦痛に染めることもなく、訳が分からぬまま死んでいった母の顔を。

少年は見てしまった。命が散る瞬間を。手で花を握り潰すかのように、容易く命が散る瞬間を。

「――え？」

少年の口から漏れ出るかのように言葉が発せられる。だが、たった一言だけ。いや、一言と言っているのかすら分らない短い言葉。今の少年では、それだけの言葉を発するだけしか出来ない。

腕は動かず、足も長時間正座をした後かのように動かない。

目は飛び込んでくる光景を直視しているものの、頭は、脳はその現実を認識しない。

銃口を向けられているというのに、恐怖も感じない。ただただ、母を連れ去った機界兵が出て行った玄関を見つめ続ける。

今の少年は――まるで人形のようなだった。

「これで任務の半分は達成か……しかし、こんなガキがターゲットなのか？ 俺にはさっぱり分からん。さっきの女だったただの女だったしな……というか殺しちまってよかったのか？」

「いいんだよ、分からなくて。俺たち下っ端は、ただお偉いさんの言うことに黙って従ってりゃいいのさ」

目の前の機界兵たちが何事かを話しているが、少年の耳には入ってこない。

今、少年の頭の中にあるのは、純粋な困惑、純粋な悲しみ、純粋な――殺意。

こいつらは何だ？

――機界帝国の、機界兵。

こいつらは何をした？

――母さんを殺して、連れ去った。

ならばどうする？

――殺す。

虚ろだった少年の瞳に、殺意と憎悪が宿る。どこまでも純粋な、殺意が。どこまでも純粋な、憎悪が。

少年の雰囲気が変わったことに気づかぬまま、機界兵たちは話を続ける。

「だけどよー、やっぱり気にならないか？ このガキが何なのかよ」

「アホ。余計な詮索は止めとけ。でないと、首が飛ぶぜ？」

「げっ、そりゃ勘弁だ。俺あまだ死にたくねえ」

「ハハッ、機界兵つつつても死ぬ時は死ぬから——」

表情がない能面のような顔で、おどけた調子で機界兵は言う。

そして、殺意と憎悪に身を任せた少年が脚に力を込め、機界兵に飛びかかろうとした瞬間——

「——な？」

——機界兵の首が飛んだ。

「え……？」

「は……？」

少年と機界兵の声が重なる。二人が呆けている間に、先程までおどけていた機界兵の首は宙を舞い、少年の前に落ちる。それに伴い、あるじ首を失った機界兵の身体が前のめりに倒れる。

そして、少年の視線の先……機界兵が倒れた先には。

「……」

身に着けているのは赤いジャケットに赤いスカート、赤いブーツ。背中が隠れるくらいにまで伸ばした赤髪に赤い瞳、首に巻いた赤いマフラー。

振り切られた右手には、赤い刀身の片刃剣。腰には片刃剣を納めるための物と考えられる赤い鞆。

全身を血で染めたのかというぐらい、赤い少女が立っていた。

「なっ……てめえ、まさか——くっ！」

放心状態から復活した機界兵が、少女に向けた機関銃の引き金を引く。放たれた弾丸は少女の身を貫き、蹂躪するかに思われた。が、少女は訪れるはずの未来を凌駕する。

スキル・リリース アクセラレータ
「——術式解放。加速」

「ッ……な——ろお！」

機界兵に届いたのは銃弾に身を貫かれる少女の悲鳴ではなく、感情の起伏がまったく感じ取れない、少女の冷淡な声。そしてその声は、機界兵の背後から聞こえた。

機界兵は咄嗟に振り返り、機関銃の銃身で少女に殴りかかろうと機関銃を持った右手を振りかぶる。

「術式解放。炎刃」
フレイムエッジ

「ぐおっ……!？」

だがしかし。刀身に赤い炎を纏った片刃剣によって、機界兵の右腕は何の抵抗もなく斬り飛ばされる。

斬り飛ばした右腕に目をくれることもなく、片刃剣を両手で持ち高く振りかぶる少女を見て、機界兵は忌々しげに少女を睨みつけ。

「【ブラッディ・キャット血濡れの猫】に出くわすなんぞ、聞いてねえぞ……!」

「——さようなら」

その言葉と共に振り下ろされた炎刃は、容赦なく機界兵を切り裂いた。

真つ二つとなった機界兵を数秒見つめ、動かないことを確認した少女は片刃剣をヒュンヒュンと左右に振った後、腰に提げた鞘へと納める。

圧倒的。そうとしか言いようがなかった。二体の機界兵を歯牙にもかけず、瞬く間に葬った少女に、少年は目を奪われていた。いや、正確には少女の顔に、だ。

……何を、考えているんだろう。

少女の顔からは、何も読み取れなかった。喜びも悲しみも怒りも殺意も。あらゆる感情が元々なかったかのように、抜け落ちている。初対面である少年がそう感じてしまうほどの、無表情。この顔こそが能面と言うのではないだろうか——少年はそうとまで思っていた。だが、少年は少女のことを——この世界の何よりも美しいと思っ

た。

「……あなた」

「……え、あ……な、なんですか？」

突然少女に声を掛けられたことに、少年は少し驚く。目の前の少女は自身とは別世界の住人のように思えて、声を掛けてくるなどと思っていなかったからだ。

少年の心境など気にも留めずに、少女は背後に振り返り。

「あそこの血。一体誰の血？」

少女の視線の先には、大量の血が広がっている床。少年の母の血だ。

床に広がっている血を見ると、もう向ける相手はいないと言うのに、胸の奥底から再び殺意と憎悪が湧き上がって来る。それを表情に出さない様に必死に抑えながら、少年は少女の疑問に答えるべく言葉を探すが、自身の心の整理がつかない。

——機界兵が憎い。奴らを殺せ。

頭の中に誰とも知れない声が響く。

……違う、今はそんなことを考えている場合ではない。だが、頭の中では分かっているのに、心がそれを受け付けない。心の中で暴れまわる感情を抑え切れない。

「——そう。あなたも私と同じなのね」

「……え？」

突然、少女は全てを悟ったかのような声を漏らす。

少女の言葉の意味が分からず少年が呆けた声を出す、気にせず少女は続ける。

「奴らが憎くて堪らない。憎悪の感情が抑え切れない……そうでしょう？」

「ッ……」

少年は声に出さずに驚く。そして少女を睨みつける、『何故分かった』と。

途端目つきが変わった少年を見ても、少女は表情一つ変えることなく。

「……」

「……？」

スッ——と。少年の前に手を差し伸べた。先程まで片刃剣を握っ

ていた右手だ。

突然の行為に、少年は困惑するしかない。状況に付いて行けない。何が起きているのか、少女は何がしたいのか……ふと少年は、少女の目を見る。血のように真っ赤な瞳を。

そして、気付く。

「世界は理不尽。良い人程早く死んで、悪い奴程しぶとく生き残る。おかしいと思わない？ 大切な人たちを殺した奴らがのうのうと生き延びて、今もこの世界に存在しているなんて……おかしいと思わない？」

少女の瞳には。

「機界帝国。あいつらが私の敵。そして、あなたの大切な人を奪った敵。今も尚、世界に悲しみを生む種を振り撒き続けている……敵。あんな奴らが我が物顔で蔓延^{はびこ}る世界なんて、おかしいと思わない？」

少女の瞳には――

「おかしいと思うのならば、手を取って立ち上がって。理不尽に立ち向かって。あなたにはその資格がある、責任がある」

――少年と同じ、純粋な……どこまでも純粋な憎悪と殺意が宿っていた。

だけど。

「私と、【血濡れの猫】と——一緒に戦ってくれない？」

それでも、少女は美しかった。

——世界は理不尽だ。

——ならばどうする？

——立ち向かえ。

——理不尽に、立ち向かえ。

——理不尽を、世界を殺せ。

第二話

「私と、
【血濡れの猫】ブラッディ・キャットと——一緒に戦ってくれない？」

赤い髪に赤い瞳、赤いマフラーに赤いジャケットとスカート。

全身を血で染めたかのような赤い少女が、その瞳に底知れぬ憎悪と殺意を宿しながら差し出した手。マフラーで隠された口から紡がれた、誘いの言葉。

誘いの言葉と言っても甘いとか、そういったたぐいのものではない。これは、この誘いは——少年を地獄へと誘う、悪魔いざなの誘い。少年を血濡られた道へと引き摺りこむ、さながら地獄への片道切符。

本来なら誘うという行為は、それによって生じる利点を説明してから行うこと。だが少女はこの手を取ることにによって何が起きるか、といったことを一切合切説明していない。

……いや、それは違う。少女は、説明する必要があると悟った……
…感じたのだろう。

少年の瞳に、自身と同じ憎悪と殺意が宿っているのを見て、そう感じたのだろう。そして、少女が少年に感じた感情は——間違っていないかった。

「……」

銀色の髪を持つ少年は、少女が差し出した手を、迷うことなく取った。その手を取ることにによって何が起こるのかを完全には理解してはいないものの、大体のことは把握出来ていた。分かっていた。この少女の手を取ることが、正しい判断なのだと。正しい道なのだと……少年は確信していた。

「……ん」

「う、わっ、わっ……わ」

自身の手を取り、共に世界と戦う決意を決めた少年に、少女は当たり前だとしても言わんばかりに、尻餅をついていた少年の手を引っ張り強引に立ち上がらせる。

少女の背は、少年の背と大して変わらなかった。つまりは、少年の顔のすぐ前には少女の顔。

……ち、近い、な。

瞬く間に、少年の顔がカァッとリングのように真っ赤になる。何を隠そうこの少年、今まで生きてきた15年間、触れ合ってきた女性……ひいては人間は母一人で、母以外の人間に会うのは初めてだったのだ。そして、目の前にいるのは自身と同じ年頃の、美少女と言って差し支えない容姿を持った少女。顔が赤くなるのも仕方ないだろう。

口をパクパクと開閉させて動かなくなった少年に少女は首を傾げるも、大したことではないだろうと判断し。

「名前」

「あ、あう……え？」

「だから名前。あなたの名前、教えて」

少女は無感情……それ故に無垢な瞳を少年に向ける。

その視線を受けて少年は、自身の名を目の前の少女に告げていないことと、少女の名前を知らないことに気づき。

「えっと……僕の名前はギルト・フェステイン。母さんにはギルトと呼ばれてた。それで……キミの名前は、何？」

自身の名前を告げ、少女に名を尋ねる。

少年——ギルの問いに対して少女は。

「私の名前は……アルティ・フォルチュナ。アルティでいい。それと——」

相変わらずの無表情で、自身の名を告げて。

「これからよろしく。ギル」

これまた相変わらずの無表情で、そう言った。

お互いの名前を教え合った後、ギルはアルティと手を繋いだまま、左右を木々に挟まれた道を歩いていった。向かう先は、アルティが仲間と事前に決めていたという合流地点。

『もし機界兵と会ったら面倒だから』と、アルティはギルの手を離さずにいた。逆に手を繋いでいた方が面倒なことになるんじゃないかとギルは口を開きかけたが、二体の機界兵が目の前の少女によっていとも簡単に斬り倒されたことを思い出し、喉^そまで出かかった言葉を抑え込む。おそらくアルティにとってはこの状態の方が色々と対応し易いのだろう——ギルは心の中で勝手にそう納得して、無言のまま足を進めようとして。

「——そうだ。ねえ、アルティ」

ふと頭に浮かんだ疑問をぶつけることにした。

ギルの呼びかけに、アルティは首だけを動かして振り返り。

「何？」

「どうしてアルティはここに来たの？　ここ、自分で言うのもなんだけど、凄い田舎だと思っただけど……」

ギルとアルティが立つこの大地の名は、トレンディア大陸。大小様々な国が存在していた歴史ある大陸だ。

ギルが知る中で、今も現存している大国は三つ。

大陸の中央に位置する【騎士国】ラスガティルト、大陸の北側に位置する【商業国】ハルヴェルディ、そして——機界兵を用いて大陸中の国という国、村という村を破壊している、機界帝国。

ギルが知っているのはこれぐらいだ。ラスガティルトとハルヴェルディについては母がよく教えてくれたのだが、機界帝国についてはあまり教えてくれなかった。教えてくれたことと言えば、帝国は機械で身体を構成した機界兵という兵士を使って大陸中を侵略していることぐらい。

更には、ギルとその母が住んでいた家があったのはハルヴェルディから見て東、ラスガティルトから見て東北にある、大陸の端っこだ。家の外にあるのは森だけで、周りには自分と母以外人っ子一人いやしない。そんな環境でどうやって母は食糧などを調達していたのだろう、今考えれば不思議な話だ。だがそれは母を助け出してから聞けばいい、とギルは結論づけ、アルティの答えを待つ。もしかしたら、機界兵が何故母を連れ去ったのかも知っているかもしれない。そうギルは淡い期待を寄せていたのだが。

「私たちを支援してくれている国の市長からの依頼。この場所に機界兵が現れるって言うから来た。そうしたら——」

「僕がいた？」

「そう」

期待している答えは返って来なかった。

しょうがないか、と思う反面、またしても疑問が浮かび上がる。

アルティに『この場所に機界兵が現れる』という情報を与えた市長

とは何者なのだろうか。その人物のことについて尋ねるために、ギルが口を開こうとした瞬間。

「アルティ様！ ご無事ですかー！ー！？」

森の静寂を破るとんでもない声量の、女性特有の甲高い声が聞こえた。

あまりの大声にギルは両手で耳を塞ごうとするが、アルティと手を繋いでいることを今更ながらに思い出した。仕方がないので頭が上下左右に揺さぶられるような大声を必死に耐えて、目に涙を溜めながら声が聞こえた方向を見る。

するとそこには、背はアルティと同じぐらいで、黒いジャケットに黒いスカート、ジャケットの下に着たシャツの上から胸を護る役割を持つ白銀のプレートアーマーを身に付けた、黒髪を左右に結んだ黒目の少女がいた。

……誰？ ギルが疑問に思っていると件の少女は、右手に握っている先端に天使の羽の様な装飾がされた白い長杖を手早くギルに向けて。

スキル・リリース
「術式解放！ 光弾！」

「ええ！？」

杖の先端から光の弾丸を放った。放たれた弾丸はまるで吸い込まれるかのように、突然の出来事に慌てるギルの顔面に――

「……術式解放。炎盾」
フレイムシールド

——ぶつかる寸前に、アルティが突き出した左手の前に現れた、円形の炎の盾に阻まれた。

突然訪れた命の危機が去ったことにギルはホッと一息を吐き、光の弾丸を放った少女は「チッ、外したか……！でも、まだ！」と忌々しげに呟き、再度杖をギルに向ける。炎の盾を消したアルティは少女に視線を向け。

「レスティ。いきなり何するの？」

「何するの？　じゃありませんアルティ様！　勝手に飛び出してどっかに行ったりして！　そこら中を探したんですよ！？　だというのに、だというのに……！」

アルティにレスティと呼ばれた少女はプルプルと拳を震わせた後、ビシィツとギルを指差す。

「こんなどこの馬の骨とも知れない男と一緒にいるだなんて！　一体何があったんですか！？」

「あの、どうしていきなり僕に向けて……ねえ、アルティ。さっきの光ってたやつ、なんなの？」

「ライトバレットトッシフスギル
通常術式の一つで、その中でも下級術式に該当する術式」
ロウスキル

「…………ごめん。その通常術式とか下級術式って一体――」

「――って、もう！　聞きなさー！ーい！」

レスティを無視してアルティに術式のことを聞き始めたギルに、レスティは顔を真っ赤にして叫ぶ。

少し前のギルと同じように顔を真っ赤にしているレスティに、アルティは再び首を傾げ。

「本当にどうしたの？　合流地点はまだ先だったはずだけど」

「だ、だからですね……ええい、そこの軟弱そうな男！」

「は、はい！？」

レスティが叫ぶ。レスティのあまりの迫力にギルは思わずたじろぐが、それに構わずにレスティは異様なオーラを身に纏わせたままギルの前に立ち、ズズイッとギルに顔を近づける。

女性特有の甘い匂いにギルは思わず顔を真っ赤にするが、レスティはそんなギルの様子を気にかけることなく。

「あなた、アルティ様の何なのよ！　正直に答えなさい。でないと、痛い目見ることになるわよ！？」

「い、痛い目って一体……あ、アルティ！　助けて！」

杖の先端に集まっていく光を見て、ギルは頬を引き攣らせる。先程の光弾とやはアルティが防いでくれたおかげで助かったが、この状況はまずい。首にナイフを突き付けられているようなものだ。むしろギルとしてはついさっき機界兵に機関銃の銃口を向けられていた時よりも怖い。先刻の機界兵たちはギルを捕らえるつもりだったようだから殺気などは放っていないかったが、レスティはそれだけで人を殺せるのではないかという視線をギルに向けてきている。

あまりに凄みのある殺気に気圧されたギルは、自身の命の恩人であるアルティに助けを求める。

「……ん」

ギルからの救援要請に対してアルティは、少し考えただけでこの状況を打開する答えが考えついたようで、考えついた言葉を早速口にする。

「拾った」

「「は？」」

アルティの口から発せられた意外な言葉に、ギルだけでなくレスティまでもが呆けた声を漏らす。

口をあんぐりと開けて動かなくなった二人に構わず、アルティは言葉を続ける。

「拾ったの。この先の家で、機界兵に襲われているところを拾った。だから、ギルは馬の骨なんかじゃなくて……」

「じゃ、じゃなくて？」

機界兵に襲われたという非常に気になる単語があったが、レスティはそれをスルーして先を促す。何故だか聞いてはいけない気がしたが、目の前の少年が何者なのかを知ることが最優先だと判断し、アルティの言葉を待つ。その言葉によって今まで積み重ねてきた何かが壊れるとしても。

「動くな！」

だがしかし。それが壊されることはなかった。

突然聞こえた叫び声に、アルティとレスティはギルを間に挟むように動いて守りやすい態勢をとる。二人が警戒を最大まで引き上げたその瞬間、周りの木の間に幾つもの影が飛び出してきた。

そしてその影たちは、ガシヤンガシヤンと物々しい音を立てながらも、すばやく三人を包囲する。一瞬にして退路を塞がれたことにレスティはチツと舌打ちを漏らし。

「機界兵……！」

自身たちを包囲している影たちの名を忌々しげに呟いた。何故ここまで接近されるまで気付かなかったのか——原因は当然先程までの騒々しいやり取りなのだが、杖を構えるレスティの思考はそこまで及ばない。周りを囲む十二体の機界兵が持つ機関銃。もし一斉に放たれたりすれば、指一本動かす暇もなく蜂の巣にされるだろう。それ故に、レスティは全神経を警戒に回していた。何が起きても即座に対応できるようにするためだ。

「……アルティ、こいつら……！」

「そう、機界兵。私たちの、敵」

アルティはギルと繋いでいた右手を離して腰に提げた片刃剣の柄を掴み、鞘から引き抜く。ギルを連れ去ろうとした機界兵二体を葬った、赤い刀身の片刃剣だ。

アルティは無言で目の前の機界兵に片刃剣を突きつけ、憎悪と殺意が混じり合った瞳で睨みつける。

「ッ……た、隊長……！」

「うろたえるな！ 数では我らが有利、そしてそれ以前に——我らは機界兵なのだぞ！？ 人間を超越した、完全なる存在なのだ！」

アルティから発せられている無言の圧力に、片刃剣を突き付けられた機界兵は思わず後ずさるが、隊長と呼ばれた機界兵が士気を上げる為に声を上げる。自身の言葉に酔っているのか、軽く興奮した

ように部下に向かって捲し立てている隊長に向かって、レスティはふん、と鼻を鳴らし。

「みつともないわね。人の身体を捨てた末に、対価として手に入れた冷たい機械の身体が完全ですって？ 笑わせるわ」

「ハッ、虚勢を張るのは止めろ【血濡れの猫】の術式術士！ まあ、こうして命を我々に握られている状況では、そうして虚勢を張るところらしいか出来ないのだろうか！ ハハハハハハ！」

「……もう！ 囲まれてさえないなければ、こんな奴ら一捻りなのに……」

下卑た笑い声を上げる隊長に、レスティは悔しそうに歯を食い縛る。相手のさじ加減一つで自身を含めた三人の命が散ってしまうという絶望的な状況。レスティに出来ることは、ただ逆転の機会を待つだけ。

「……ッ」

「ギル？」

そんな状況の中、ギルは自身の胸を押さえてうずくまる。突然苦しみ始めたギルに、アルティは片刃剣を機界兵たちに突きつけたまま、気遣うような声をギルにかける。だがギルには、その声に意識を傾ける余裕はない。

——殺せ。機界兵を、殺せ。

頭の中に直接響くような声。その声と、胸の奥から湧き上がって来るかのような痛みがギルを苦しませる。殺せ、殺せ、殺せ——その言葉だけが永遠に繰り返される。まるで洗脳するかのようには繰り返される言葉を、ギルは必死に否定し続ける。

母を連れ去った機界兵は憎い。それは確かだ。だが、この声には……この声にはだけは屈してはいけない。何故だか分からないが、ギルはそう感じた。

——殺せ。殺せ。機界兵を……殺せ！

しかし。頭の中に響く声は収まることを知らない。それどころか、勢いを増し続けている。

……あ、もう駄目だ。

濁流のように押し寄せる声に負け、ギルは遂に意識を手放し——

「ギル！」

「ッ……あ、アルティ？」

——そうになった瞬間、アルティの呼びかけによって意識を繋ぎ止められる。ハッとして周りを見渡すと、見える光景は未だ自身たちを囲み、機関銃の銃口を向けている機界兵たち。どうやら膠着状態はまだ続いているようだった。

「胸を押さえてたけど、大丈夫？」

「だ、大丈夫。ちょっと胸が痛んだだけだから」

自身の胸に手を当てる。胸の奥から湧き上がっていた痛みはなく、機界兵を殺せと囁いてくる声ももう聞こえない。

ギルの様子を見て問題無いと判断したのか、アルティは片刃剣を握る手に力を入れて。

「……そう。じゃあ飛ばされないようにしっかりと踏ん張って」

「え？ それってどういう——」

意味？ と、ギルは先の言葉を紡げなかった。
何故なら。

「術式解放！ パワーキヤノン 集束波動！」

「う、わぁ!？」

目も眩むような白い光の奔流が、ギルの目の前にいた四体の機界兵を文字通りこの世から消し去ったからだ。

「な、何事だ!？」

突然の出来事に、隊長は静かに終息していく光の奔流が消えた先を見てうろたえる。当然だろう、部下たち四体が一瞬にして消え去ったのだから。

だが、彼の驚愕はまだ続くことになる。

「どうも、隊長さん。余所見なんてしていいのかしら？」

「な——ぐっ!？」

背後から聞こえた女の声。隊長が慌てて振り返った瞬間、視界が闇に染められた。いや、視界が塞がれたわけではない。人間の手に、頭を掴まれたのだ。

隊長は、自身の頭を掴む手の指の間から、籠手を装備した手の主であろう女の顔を見た。空のように青い髪を後ろに結んだ緑色の瞳の女は、ニツコリと笑う。その笑顔に言い表しようのない悪寒を感じた隊長は、生き残っている隊員たちに助けを求めようと声を上げようとするが。

「術式解放……轟炎!」
エクスプロージョン

「——!？」

瞬間、女の手には掴まれている頭が爆発した。正確には隊長の頭が爆発したのではないのだが、既に絶命してしまった隊長には知る由

も無いし、知るすべもない。

「た、隊長！？ く、くそっ……！」

「ッ……！？」

隊長がやられたことに生き残っている機界兵たちは動揺するが、せめて目の前の敵は、と機関銃をギルへと向ける。撃たれると思ったギルは思わず目をつむるが。

「術式解放！
ライトセイバー 光剣！」

「がっ！？」

「ディック！ こ、この……ぐあ！？」

「あ……」

銃声が響くことはなく、代わりに響いたのは機界兵たちの悲鳴だった。

ギルが目を開けるとそこには、機界兵の胸に杖の先端から伸びている光の刃を突き刺しているレスティ。レスティの足元には頭部を失っている機界兵が一体。おそらくこれもレスティがやったのであるろう。

自身と同程度の年頃の少女が今の一瞬でこんなことをやってのけたことにギルは驚き、無意識に視線がレスティに縫い付けられる。

ギルの視線に気付いたのか、レスティは機界兵から杖を引き抜いて、眉を顰めながら振り返り。

「何見てるのよ」

「あ、いや。僕と同じぐらいの歳の女の子なのに、凄いなあって」

「あなた、案外余裕そうね……帝国と戦うんだからこれぐらい出来なきゃ駄目よ。それに――」

「う、うわあああああ!？」

レスティはギルから視線を外し、みっともない悲鳴を上げながら機関銃を乱射している機界兵を見る。

機界兵が銃を向けている先には、首から上がなくなって……いや、斬り落とされて地面に崩れ落ちた機界兵が四体。
そして。

「ふっ――!」

それを成した赤い少女。

アルティが振るった片刃剣が、機関銃を乱射していた機界兵の頭部を斬り落とす。斬り落とされた頭部はクルクルと中空を舞い、重力に負けて大地へと落ちる。

片刃剣を左右に振るい、左腰の鞘に納めたアルティを見てレスティは。

「――私は、あの方を護れるぐらい……強くないといけないの」

並々ならぬ決意を宿した言葉を、口にした。

レスティは、様々な感情が混ざり合ったような表情をしていた。一体彼女の……いや、彼女たちの過去に何があったのか。ギルはそれが異様に気になった。出会ってから一時間も経っていない二人の少女に、ギルは惹かれていた。

「……よし。全体倒したわね。フランツ！ 周辺に敵はいる？」

「いえ、もういませんよ。影一つ見えません。市長の情報は当たっていたようです、まさか機界兵の数まで正確だとは……」

「相変わらずよく分からない人よね。まあ、いいけど……アルティ。大丈夫だった？」

隊長を倒した青髪の女の返事に答えたのは、緑色の髪を端正に切り揃えた穏やかそうな雰囲気を持つ金色の目の、フランツと呼ばれた青年。だが、そんな穏やかそうな雰囲気とは相打って、彼が手にしているのは白色の巨大な突撃槍^{ランス}。槍の先端から光の粒子らしきものが漏れ出ていることから、先程の砲撃はこの槍で放ったもののようだ。

状況を把握した青髪の女は、アルティに声をかける。声をかけられたアルティはコクリと頷き。

「大丈夫。二人が助けに来てくれたから」

「……全くもう。私たちが来るのがもう少し遅かったら死んでたかもしれないってのに……」

「ははっ。無事だったから良かったじゃないですか」

「そうだけど……まあ、いいわ。で？　あの男の子は誰？」

青髪の女がレスティの隣に立つギルを指差す。それに伴い、その場にいる全員の視線がギルへと集まる。

自身が話題の中心になっていることに気付いたギルは、

……と、とりあえず自己紹介！

何故かそんな結論へと辿り着き、慌てて口を開こうとすると。

「えっと、僕はギルト・フェステー——」

「ペット」

「——イン？」

何やら聞き逃せない単語が聞こえた。

全員の視線がギルから、その単語を発した人物へと移る。その人物——アルティは何故皆が怪訝そうな顔をして自分を見ているのかも分からぬまま……いや、考えようともせずに。

「だから、ペット。ギルは私の――ペットだから」

今までギルが積み重ねてきたものを……木っ端微塵に破壊した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1522s/>

血濡れの猫ーブラッディ・キャットー

2011年7月27日22時35分発行